49　大森文子　　第33回看護教育の大学化の始まり、「看護」を考える選集15
大森文子が見聞した看護の歴史
日本看護協会出版会　　2003

第33回

看護教育の大学化の始まり

看護教育の大学化

日本看護協会は、各県に一校の看護大学と長年にわたって求め続けてきた。しかしつい最近までは、一九八六（昭和六二）年開設の日本赤十字看護大学、北里大学看護学部、一九八九（平成元）年の東京医科歯科大学医学部保健衛生学科看護学専攻科が加わっても、ようやく十一校という寂しい状態であった。一九八九（平成元）年と言えば、一九五二（昭和二七）年に高知県立高知女子大学家政学部看護学科が誕生してから、実に三十七年が経過していたことになる。看護婦の質の向上という課題に対して、行政当局も社会も無関心であった。また看護界の側の力不足もあったと思う。

しかし、人口の高齢化が進み、一九八三（昭和五八）に老人保健法が施行されて以来、各種の医療・介護職種が制度化されるとともに、在宅医療の推進、訪問看護制度の実現など、看護職の役割拡大が求められるようになった。そして、一九八七年の厚生省看護制度検討会報告書による「二十一世紀に向かう看護制度」の発表、一九九一（平成三）年の「看護の日」制定、一九九二（平成四）年の「看護婦等の人材確保に関する法律」公布により、看護大学の設置がいっそう急速に進んだ。二〇〇二（平成一四）年四月現在百一校（熊本大学教育学部の特別教科一と国立看護大学校（厚生労働省）を含む）という盛況で嬉しい反面、必要な看護教員が不足するという看護界の悲劇にもなっている。

今回は、五十年前の看護大学発足時を振り返ることにする。

看護大学第一号
高知県立高知女子大学家政学部看護学科

四国の最南端にある高知県立高知女子大学家政学部看護学科は、当時の高知県衛生部長聖成稔氏の発想が元になって生まれたものであり、当時の厚生省看護課長の金子光氏が大いに協力したと言われている。その経緯については『初期の看護行政　看護の灯たかくかかげて』（金子光編、日本看護協会出版会、一九九二）に詳しく、当時、高知県衛生部看護係に勤務され、後に高知県看護協会支部長等を務められた谷亀子氏が記述されている。

見学するために、筆者も同校に伺ったことがある。一九四五（昭和

二〇）年の戦時中に、高知女子医学専門学校が開設されたが、敗戦により一九四七（昭和二二）年にはいったん廃校とされ、新たに四年制の女子専門学校として再発足した。一九四九（昭和二四）年の学制改革により同校は女子大学に昇格し家政学部生活学科のみとなった。聖成部長は、新制度による看護教育の充実を図り、指導者の育成を目指したいと希望されていた。同県には、一九五〇（昭和二五）年指定の高知赤十字看護学院のみが甲種看護婦養成施設であったので、この大学で看護婦教育をしたいと、金子課長に相談された。金子課長は文部省の意向も聞き、指定規則による指導もされた。

1976年，保健文化賞受賞時の和井兼尾氏（前列右）。前列左が筆者，後ろは上村聖恵氏

一九五一（昭和二六）年の入学開始を目指したが、設置申請が遅れてしまい、翌年回しになった。そこで金子課長の指示を受けて、県立高等看護学院が申請許可を得て、同年に十六名を入学させた。

翌一九五二（昭和二七）年に高知県立高知女子大学家政学部看護学科が開設となり、この高等看護学院生は大学の二回生として編入が認められ、新一回生五名も入学した。第一期生は一九五五（昭和三〇）年に三名が卒業し、日本で初めての看護学士となった。

谷亀子氏も書いておられるが、当時は、「看護婦に大学教育は必要ない」との声が多かった。しかし四国地区民政部の熱心な看護指導官、ワーターワース女史の指導により同県の看護職の専門意識は高く、殊に看護係長の和井兼尾氏と上村聖恵保健婦長（後述する）が熱心に主張して、聖成部長を支援して看護学科開設の実現を見たのである。困難であったのは、高知県にやってくる専任の看護教員が得られないことであった。もちろん、当時は教授適格者がほとんどいないと言われている時代でもあった。

和井兼尾氏はこの学科に講師として就任された。同氏は高知県出身で、衛生会看護婦学校卒業後、一九三七（昭和一二）年に上京し佐伯栄養学校に入学、一九三九（昭和一四）年四月同校高等科卒業後、栄養研究所に所属中の同年八月、島根県衛生課技官として招請されて赴任し、島根県民の保健衛生の向上に尽力し、一九四一（昭和一六）年島根県立保健婦養成所の設立に際しては、三浦貞（故永野貞）氏を教務主任に招き、協力して県内の保健婦活動の確立を図り、県民の健康と福祉を守られた。

高知県では一九四七（昭和二二）年に、進駐軍民政部の指示によって看護行政の確立が図られ、県衛生部は看護係長として、自治体行政の実績を評価して、県人の和井先生の就任を懇請して迎えた。

四国地区民政部看護指導官のワータワース女史により県内の看護職の再教育及び医療施設の改善が進められ、和井先生はもちろん、看護係は大活躍であった。さらに看護大学開設の大任が起こったのである。和井先生は看護協会高知県支部長、日本看護協会理事としても活躍された。大学では中心として尽力され、広く人脈を求めて、有能な非常勤講師の集中講義の実施もされた。ロックフェラー財団駐在員になられたヴァージニア・オルソン先生も同情されて、宣教師で看護婦であるヴィアトリス・ロング女史を一年十カ月、無給で看護学教授として派遣された。戦後の不況時で大学進学は難しく、殊に看護婦の教育については自己負担がない時代の看護大学であったから、大学草創期には学生集めにも大変苦心されたようである。学生定員の二十名に及ばなかった。

山崎近衛先生と学生と学生たち（『火筒のひびき　ある従軍看護婦の記録』より）

東京から故中道千鶴子氏（聖路加女子専門学校を卒業後、コロンビア大学に留学。公衆衛生院、東京大学医学部衛生看護学科講師等を務める）も非常勤講師として、集中講義に出張された。当時「交通事情も悪く、東京、高知の旅行が大変、しかし、看護大学維持と、学生のために行く」と、関節リウマチの持病を押しての、中道氏の貢献であった。

和井先生は助教授、教授と歴任され、その間に優秀な後継者を育成し、卒業生が母校の教育の中心になること、また広く社会に貢献する優秀な人材を送り出すことを目指された。その功績により、第二十八回保健文化賞を受賞された。一九七四（昭和四九）年に定年を迎えられ、名誉教授となられた。また、一九八七（昭和六二）年にはこれらのご功績と、長年にわたっての看護界の組織活動への尽力を称えて、日本看護協会名誉会員に推挙された。一九九〇（平成二）年五月に八十歳でご逝去された。

山崎近衛氏は一九五七（昭和三二）年に同大学に助手として就任、講師、助教授、教授を歴任し、二十年間勤務され、定年退職された。山崎氏は一九三二（昭和七）年に高知赤十字看護婦養成所卒、同赤十字病院勤務、一九三七（昭和一二）年より戦時勤務の救護班要員として招集されて、以後八年間に三回にわたっての招集で、国内外で病院船等の苛酷な勤務につかれた。その間、一九四二（昭和一七）年十月からは救護班婦長としての重任に耐えられ、中国の興城第一陸軍病院で一九四五（昭和二〇）年八月十五日の敗戦を迎えられた。不運にも部隊は帰国出来ず、惨めな転進の後、一九四五（昭和二〇）年十二月、中国の内戦に巻き込まれ、八路軍（解放軍）の捕虜となり、医療者として従軍を命じられた。隊も二分されて斑員も分かれ分かれになった。その後はまったく苦難の連続で、中国解放戦争従軍者と同様に、八年間の死線を超えた勤務をされた。

強い意思と婦長としての責任感でこの苦境に耐えて、一九五三（昭和二八）年四月二十日に帰還されたのであった。日本赤十字社の救援が及ばなかったのであろうか？　敗戦後のわが国の無力さが、気の毒

な方々を見殺しにしなければならなかったのであろう。

山崎先生は帰国後、民間病院、県立病院勤務を経て、和井先生から豊富な臨床経験と長年の不屈のリーダーシップと見識を見込まれて、大学教員就任を求められた。その期待通りに、学生に敬慕される臨床指導者として、卒業生が看護婦としての進路を選ぶモデルになられた。山崎先生の中国での苦闘の物語は『火筒のひびき　ある従軍看護婦の記録』（山崎近衛著、高知新聞社、一九七七）で発表されており、筆者は読むたびに涙ながらに、山崎先生の意思の強さと人間愛、リーダーシップに感動、敬服する。

なお高知新聞が同年四月十一日から五月三十一日まで、この従軍物語を掲載し、多くの県民から称賛の声が寄せられ、あちこちから、山崎先生に講演依頼があった。学生も初めて山崎先生の経験を知り、さらに尊敬を深めた。山崎先生は和井先生を助けて、大学の教育の充実に向けて多大の貢献をされた。なお日本看護協会高知県支部看護婦部会長、日本看護協会看護婦部会評議員や看護連盟支部役員などの組織活動にも活躍し貢献されている。

高知県が、看護大学第一号を設置し、不便な中で維持し優秀な卒業生を社会に送られていることは尊敬に値する。今までには県の財政上の問題から廃止の声が上がった時もあったと聞くが、和井先生を先頭に上村、谷両氏等の看護協会幹部の力で食い止められた。何にも増して強いのは、卒業生が県内の保健所や病院で実績を上げ指導者として活躍されてきたことであろう。

現在は第一期生を始めとして他県の看護大学等で活躍されており、例えば、厚生省健康政策局看護課課長の久常節子氏（現・慶応義塾大学看護医療学部教授）、日本看護協会副会長・ICN理事、現在協会長、兵庫県立看護大学長の南裕子氏、日本看護協会保健婦職能理事、東京医科歯科大学医学部保健衛生学科看護学専攻の島内節教授ら、中央での活躍にも敬服するものがある。

「蒔かぬ種は生えぬ」これは筆者のよく使う言葉である。高知県は明治維新の際には坂本龍馬を生んだ。やはり県民性かと思う。私は今、司馬遼太郎氏の『この国のかたち(2)』を読んでいるが、その中に次のようなことが書かれている。

明治維新後に全国的に藩主が藩知事と改称されたが、まだ士農工商の階級制度が残っていた明治三年に、当時の高知藩は、「人間は平等である」との「諭告」を出して「貴賤上下の階級はない。当藩は今日より人間は階級によらず貴重の霊物なるを知らしめ、人々をして自由の権を持たしめる」等と通告している。日本で最も進んだ自由民権の県だったと書かれているのを読んだ。なるほど看護大学の第一号が、高知県に誕生した理由がわかったという思いがし、改めて開学者に敬意を表したのである。

ここまで書いてから、島内節東京医科歯科大学医学部教授のご好意で、高知県立高知女子大学の三十年史を拝見する機会があり、和井先生が創設期の苦労を書かれているのを読んだ。それによると、教職員組織についての苦労が大変だったようである。一般教養科目は、既に発足していた生活学科に陣容が揃っており、教職科目も選択することが出来た。しかし、専門科目である看護教員の高知県赴任が得られない。そのご苦労は前述の通りで、県財政上からも選任者の定数が長く抑えられたことに困られている様子がうかがえる。しかし、実習施設の県立病院、保健所等から、院長、婦長たちの支援が得られ、県内挙げての支援体制があったようである。現在は卒業生が中心となられて、博士課程まで開設、長年の実績を誇られている。

看護大学第二号　東京大学医学部衛生看護学科

一九五三（昭和二八）年四月、今から四十九年前、高知県立高知女子大学に次いで、東京大学医学部衛生看護学科が開設された。日本看護協会としては文部省に対して、学校教育法による正規の学校教育として看護教育が位置付けられるようにと、陳情してきた。それが東京大学に取り上げられたと筆者たちは大喜びであった。しかしそれが筆者にとっても苦難の道に繋がるとは夢にも思わなかったのである。

この学科の産みの親は、東京大学医学部生理学科の教授であった福田邦三氏で、一流中の一流と言われる、学識、人格ともに崇高な方であった。福田先生は一八九六（明治二九）年生まれで、当時五十七歳であられた。東京大学医学部を卒業後、同医学部生理学科助教授となられ、その後一九二九（昭和四）年から二年間、ロンドンに留学されている。そこでナイチンゲール女史の功績やセント・トーマス看護婦学校について見聞されたのだと思う。日本の看護婦の社会的地位の低いことや、その質について、その頃から気付いておられたのであろうか？

「民族衛生学の立場から日本の将来を考え、英国留学中のあらゆる機会に、まず彼の国のデモクラシー社会の民衆生活の理念と実践の実情に触れるように心がけました。日本の伝統、国情とアングロサクソンの社会の伝統、国情、常識が違うので両方比べてみて参考にし、日本に採用すべきものは、国民の総意の結集したものとして、進化させなければならない、と考えました。民族衛生では国民の質を上げるにはどうすればよいかを考えるのです」

「自由、平等、友愛はフランス革命以来評価されて標語となりましたが、日本語では変なひずんだ形で教育界に伝わって、中学生が暴れて野性を発揮したりしています。自主性を養うには理性が伴うことが必要。日本民族を優秀な素質にするには、盲従性を去ること、感情に流れないで理性を養うこと。勝ち負けよりも共に栄えることを目標にしなければいけません」との主旨を一九八五（昭和六〇）年の民族衛生学会総会特別講演でおっしゃっている（『福田邦三先生回想記』（福田邦三先生追悼記編集委員会編、一九九〇）。

誠に先生らしいお言葉で、衛生看護学科で素質の良い看護婦の指導者を育成することが先生の目的であった。東大医学部附属病院では看護婦養成の歴史は古く、一八八六（明治一九）年桜井女学校の実習受け入れに始まるとされているが、患者の付添制度が続き、看護婦は医師の補助者として扱われていたので、大学教育には反対の意見が多く難航した。福田先生は小石川にある東大分院が廃止されそうだと聞き、分院にある附属看護婦養成所を廃止し、大学の校舎とし、分院を実習病院とする案を提出された（一九五二／昭和二七年）。

教授会では、分院側は少数なので、信頼の高い福田教授の提案でもあったから、賛成多数で決まった。文部省は早速予算化し、一九五三（昭和二八）年四月に新入生採用、二年次までは駒場の教養学部での学習とし、女子学生四十名の採用準備に入ったのである。この時点で看護学担当の助教授として湯槇ます先生の採用が決められていた。

その詳細については、湯槇先生の著書等を参考にしながら次回で述べることにする。